

津市埋蔵文化財センター情報

まいぶん津

2009. 1. 5
第5号



津城跡調査区と津城本丸石垣（北東から、
櫓は戦後復興の模擬櫓）

最近の調査から

津城跡発掘調査（丸之内）

1 はじめに

津城跡は、安濃川と岩田川が形成した標高2m前後の砂堆上に位置する城館跡で、天正8年（1580）に織田信長の弟信包が築城しました。慶長13年（1608）に藤堂高虎は伊予国今治（愛媛県）から伊賀・伊勢へ転封となり、津城へ入城しました。高虎は慶長16年（1611）から津城の大改修に着手し、3代藩主高久が完成したといわれています。

今回、㈱百五銀行（仮称）新本館建設工事に伴い、平成20年9月から349㎡について発掘調査を実施し、現在も調査中です。

調査地はもとの津城内堀の北東角で、津城の京口御門から入り、丑寅隅櫓を見ながら本丸へ至る場所です。このあたりの内堀は大正11年～昭和11年頃に徐々に埋め立てられました。

2 内堀石垣について

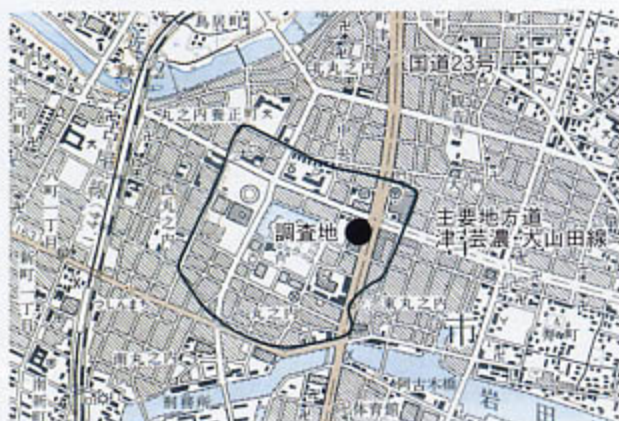
内堀石垣は、約25m以上にわたり直線的に発見され、調査区の南端部が高さ2.5mと最も良く残り、商業ビルの基礎と基礎との間にも石垣が残っていました。事業地内では内堀石

垣の北東角が確認されなかったことから、北東角の石垣は県道下に存在していると考えられます。

石垣の構造は、小口面を揃えた割石を用いた野面積みです。石垣底から約0.5mと1.3mの高さに横方向に連続する目地があり、3工程に分けて石材を積んでいることがわかります。石垣の石材は、長径で平均30～40cmで、本丸石垣が長径で平均80～90cmで、本丸の石垣よりは総じて小ぶりであることもわかりました。

3 内堀について

今回の調査で、東側内堀の幅は約85m、



調査地位置図(国土地理院『津東部』1:25,000より)



内堀石垣と暗渠（西から）

深さは現地表下約3.0～3.3mであることがわかりました。主な出土遺物は江戸から大正時代の陶磁器、瓦、下駄・漆器碗・箸等の木製品、江戸時代の土師器皿、古墳時代の土師器、中世の土師器・山茶碗等が出土しました。江戸時代の陶磁器の時期は概ね18世紀から19世紀代のものです。

4 暗渠

調査区南端部の二之丸部分で、石垣に接続した暗渠が発見されました。暗渠は東西方向に長さ約3.2m検出され、土管の直径は約30～40cmあり、さらに東へと延びているものと思われます。また、暗渠が接続した箇所、石垣の石材はV字形に乱れており、暗渠は、石垣構築後に敷設され、設置時に石材を積み直しているものと思われます。また、土管の接

続箇所では平瓦を上に乗せて補強ないしは漏水防止をし、両側の所々に平瓦を立て粘土で固定していました。東から西へ傾斜していることから内堀へ排水していたものと推測されます。時期は、出土遺物から18世紀代と推定しています。

5 まとめ

今回の調査で見つかった内堀石垣は、絵図に描かれた内堀の位置とほぼ一致し、東側内堀の幅は約85mあることがわかりました。また、二之丸部分の暗渠は石垣構築後の18世紀代に敷設され、内堀に排水されたものと考えられ、津城二之丸における計画的な排水機能をうかがわせるものでした。

(田中秀和)



津御城下分間絵図（享保4年）〔樋田清砂氏蔵、津城付近のみ、一部追加筆 調査地〕

市指定史跡 木造赤坂遺跡 (木造町)

木造赤坂遺跡は、雲出川左岸の標高7m前後の微高地上に立地する縄文時代～中世の遺跡です。昭和38年に三重大学や地元の人々によって発掘調査が行われ、弥生時代～古墳時代の住居等が見つかりました。その後、昭和46年7月1日に一部が市の史跡に指定され、現在までに久居市教育委員会(当時)や三重県埋蔵文化財センターにより、8回にわたる発掘調査が実施されています。

この遺跡に人々が住み始めたのは縄文時代からで、後期～晩期(今から3～5,000年前頃)の竪穴住居や深鉢を埋めた穴が見つかりました。また、弥生時代では中期～後期(今から2,500年～1,700年前頃)の竪穴住居が見つかりました。

さて、古墳時代は本遺跡の中心となる時代です。前期の溝からは、多量の土師器甕、高杯や底部穿孔された土器が出土し、中期末頃の溝からは、木槌等の木製品や土師器、須恵器が多量に出土しました。遺物の出土状況からこれらの溝では、水辺の祭祀が行われていたと考えられています。また、中期～後期の竪穴住居が多数発見されました。竪穴住居の中には、滑石製の白玉が多量に出土したり、勾玉等が出土したりするものもありました。竪穴住居から玉類が多量に出土するのはとても珍しく、遺構の性格を考える上で注目されます。

奈良～平安時代には、竪穴住居・掘立柱建物・区画溝等があり、墨書のある土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、役人が腰に巻く石帯(ベルト)につける巡方が出土しています。古代には、遺跡周辺に木造庄という荘園があり、その関係が注目されます。中世は近隣の木造城址の関連もあったのか、溝で囲まれた屋敷地や道路も発見されました。

木造赤坂遺跡は、雲出川流域の歴史を語る重要な遺跡といえるでしょう。(田中秀和)



遺跡位置図(国土地理院『大仰』、『松阪港』1:25,000より)



古墳時代前期溝(南から)



赤坂遺跡出土土器

市指定文化財 西毛谷南古墳出土の合口甕棺

今回は、昭和34年に津市河芸町西毛谷南古墳から出土した合口甕棺を紹介しします。

砲弾のような形をしたこの甕棺は、須恵質で蓋と身がセットになっています。棺蓋は口径57.0cm、高さ37.2cm。棺身は口径53.0cm、高さ74.5cm、蓋を被せると高さは約70cmになります。これらは粘土を積み上げては、外面から器壁を叩き締めて製作しており、内面にはその工程を物語る当具の痕が円弧を描くように残っています。また、身の胴部中央にはヘラで「X」の記号が刻まれています。

さて、西毛谷南古墳は、河芸町三行集落の北東、鈴鹿市との境界に近い標高約45mの丘陵に位置します。この甕棺は出土状況や副葬品などの詳しいことがわかっておらず、現在では墳丘を確認することもできませんが、隣接する丘陵に所在する西毛谷北古墳からは7世紀後半の須恵器や家形陶棺が出土していることから、西毛谷南古墳もこれと相前後してつくられたものと推察されます。

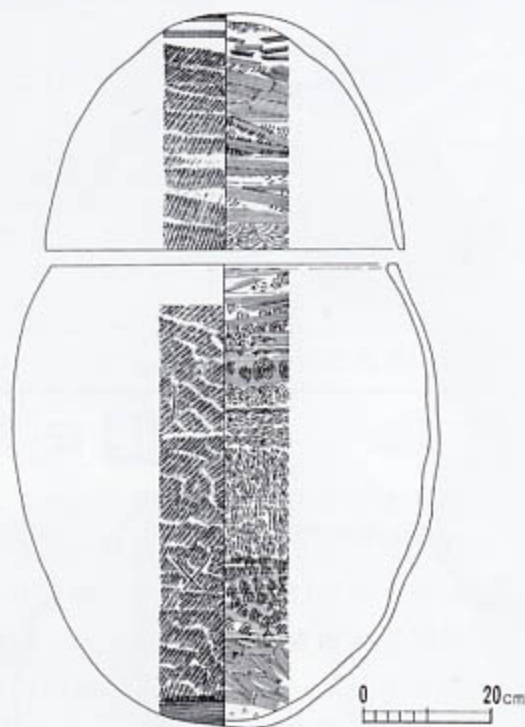
河芸町西千里・久知野・三行から鈴鹿市南部にかけての丘陵では、5世紀末から8世紀初頭に須恵器を生産していた窯跡が40基近く見つかっています。これらは徳居窯跡群と呼ばれ、県内最大の窯跡群として広く知られています。また、この地域の遺跡や古墳群の形成は、須恵器の生産と深くかかわっていたものと考えられ、西毛谷古墳群のような特製の陶棺を用いた特徴ある墓制からも、その一端をうかがい知ることができます。(藤田充子)



遺跡位置図(国土地理院『白子』1:25,000より)



西毛谷南古墳出土合口甕棺



遺物実測図 (1:12)

寄贈資料紹介③

大里窪田町出土の軒丸瓦

平成20年3月に、大里窪田町で出土した奈良時代の軒丸瓦3点を寄贈いただきました。

これらの軒丸瓦は、出土地点や出土したときの状況など詳しいことについては明らかではないものの、いずれも伊勢別街道の旧窪田宿の南側に広がる水田地帯で採集されたものです。この地域には六大B遺跡や安養院跡をはじめとする古代から中世の遺跡が近接して所在しており、一般国道23号中勢バイパスや県道津関線の建設、圃場整備事業などによって大規模な発掘調査が行われました。今回の寄贈資料は、これらのいずれかの遺跡から出土したと考えられます。

寄贈資料のうち、1と2は復弁八葉蓮華文軒丸瓦です。このうち1は中房に1+8の蓮子を配しています。外区には珠文が巡っており、復元すると32個の珠文が存在したと考え



大里窪田町出土軒丸瓦

られます。1・2と同種の軒丸瓦は六大B遺跡のほか四天王寺瓦窯跡（広明町）などからも出土しています。また3は単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、先述した複弁の軒丸瓦よりやや時期の新しいものと考えられています。

大里窪田町には、かつて安養寺という寺院が存在したと伝えられています。一連の発掘調査では、掘立柱建物が多数検出されたものの、瓦の出土量は全体的に少なく、寺院跡や瓦葺きの建物の存在は確認されていませんが、この地域の歴史を考えるうえで貴重な資料となりました。(村木一弥)



遺跡位置図(国土地理院『白子』、『棕本』1:25,000より)

編 集 後 記

あけましておめでとうございます。新年早々に皆様にまいふん津第5号をお届けすることができました。昨年は、藤堂高虎入府400年で初めての津城跡発掘調査を行い、高虎公との縁を感じた年となりました。今年はどんな遺跡にめぐり合えるのか楽しみです。(編集子)

発行日：平成21年1月5日

編集発行：津市埋蔵文化財センター

7514-0058

三重県津市安東町1225

TEL 059-229-0210

FAX 059-229-4601

印刷：森田印刷株式会社